
ジュニア ハイ スクール ~ そのまんまな名前 ~

週末の騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジュニア ハイ スクール 〽そのまんまな名前〽

【Nコード】

N 8 4 5 3 M

【作者名】

週末の騎士

【あらすじ】

ある日目が覚めたら見知らぬ中学校、見知らぬ世界にいた

僕はこの中学校でたくさんの変人たちと知り合っていく……

0話 江園 沖

ある日目が覚めたら僕は中学校にいた

「え？……ここは？」

「みなさん。入学おめれとー。私は矢留木内乃山^{やるきないのやま}夜流気無井^{やるきないみ}美れす。
以後よろすくー」

やる気のなさそうな女教師が自己紹介をした

え！？

なにその意味不明な名前！？

「とりあえず、みなさんには自己紹介をしてもらいまー」

どうやら今は中学校の入学式が終わりHRの最中らしい
『らしい』というのは目が覚める前の記憶がないからだ

「めんどいからー、ひとり5文字以内ねー」

生徒たちがざわめく

「俺は愛……」

「はいしゅーりょー。次のひとー」

この先生……やる気ないにもほどがあるだろ
愛なんとか君……可愛そうに

「あの一先……」

「はいしゅーりょー。次のひとー」

愛なんとか君の次の番の女の子が質問しようとしたらスルーされた
今の自己紹介なのか……？

その後、みんなの自己紹介がどんどん流れていく

石津栗いしづくり

歌姫 う（うたひめ う）

長狩 き（おさがり き）

などみんな途中で切れて名前の全貌が分からない
ひどすぎる……

「次ー」

「え？」

僕の番が来た

どうしよう。記憶がないから名前が分からない

とりあえず一文字目が『え』になってしまった

「そのー……き」

「えその おき君ですねー。次ー」

記憶がないと言おうとしたら文字目に達してしまっただけ
その後、自己紹介は適当に終わり適当に放課後を迎えた

これから僕はこの奇妙な世界で奇妙な名前の人たちと生活するこ
とになる

考えるのがめんどくさかったのでしたらく江園沖えそのおきという名前で過
ごそうと思った

1話 愛なんとか君

みなさんこんにちは

僕は江園沖（仮）

突如見知らぬ中学校にいて、いつの間にか放課後に

周りのクラスメートたちは「あの先生ひどいねー」「適当だよな」

「カレー食いてえ」

と、不満の声が聞こえてくる

「よお江園」

自己紹介の最初の犠牲者愛なんとか君が僕に話しかけてきた

「なに？愛なんとか君」

「ああ？俺は愛^{あい}和^わ大^{たい}雪^{せつ}。そんな変テコな名前じゃねえ」

いや、その名前も十分変テコなんですが
めんどいから愛なんとか君でいいや

「僕に何か用？」

「お前変わった名前だなーって思ってたよ」

愛なんとか君は僕に名簿表を見せてきた
僕以外の名前はどれも変テコなのばかりだ

「他の人のが変だと思うけど」

「？他のやつらはみんな名前に意味あんだろ。お前は何か意味あるのか？」

そう言われてみるとみんな個性的な名前だがちゃんと意味がある
あきた こまち うたひめ うたう
秋田小町やら歌姫歌羽やら

「意味って言われても……愛なんとか君の名前には何か意味あるの？」

「愛和大雪だ！俺の名前？」

どうせ愛は大切だろうな

「愛は大切って意味だ！」

わー

予想通りだなー

「愛は大切だぞ？江園よ」

それから愛なんとか君はひとりで語り出した

純愛っていいよな

でも愛は障害があるほど燃えるよなー

親同士が敵対関係だったり、片方が病を患ってたり

それを取り越えた時、本物の愛が生まれるよな

だけど現実にはチャラチャラした愛や離婚とかが多くてあまり好きじゃないな

遊びで付き合うとかそういうの許せないのよ俺

最近ツンデレやらヤンデレやらクーデレやらいろんな愛……あれ？これって愛だっけ？まあいいや。が、あるけど愛にもいろんな形

愛と憎は表裏一体っていうけど……

.....

愛愛愛愛愛愛愛愛愛愛愛愛するわいな……

「愛なんとか君、もういいよ」

愛なんとか君は懽然としてる

しかも彼は比較的かなりまとまっただんだ……

7

2話 記憶喪失？

軽く校内を探索してみたが内装自体は普通の中学校のようだ
記憶喪失といってもいわゆる『知識』というやつは喪失してない
らしく、以前の生い立ちが分からないだけだ

この学校（世界？）の『変』な人たちと記憶喪失は関係している
のかもしれない

とりあえず愛なんとか君と共に下校することにした
外は普通の住宅街だ

「お前の家どこなんだ？俺と帰り道同じみたいだが」

愛なんとか君が尋ねてきた

「強いて言えば駅のほうかな」

自分の家の場所なんて知らないので適当に答えた
とりあえず病院が交番にでも行って記憶喪失だって訴えてみるかな

「愛なんとか君はどこに・・・」

僕が愛なんとか君に話しかけた刹那・・・今まで歩いていたはずの
町並みが教室へと変わり、自分の椅子に腰かけていた

「…………え？？」

本当に一瞬の出来事だった
景色が歪むとか、変な音が聞こえるとか、頭痛がするとか、何か

兆候があつたとかそういうのが一切なかった
まるでテレビのチャンネルを変えるかのように
文字通りいきなり教室にいた

時計を見るとあと10分で朝のHRが始まる
日付を確認してみると・・

「嘘……でしょ？」

確か今日は4月7日だったはずなのに
日付は4月8日を示していた

「おはよー沖」

愛なんとか君が教室な入るなり僕の下へ寄ってきた

「愛なんとか君……さっきまで一緒に下校してたよね？」

「はあ？てか愛なんとかじゃなくて愛和大雪だ。確かに昨日一緒に
下校したが……一体どうした？」

僕は絶句した

さつき、本当に次の日にワープしたとでもいうのか？

「あん時は駅前で別れたけどよ。今度家に遊びにいったいいか？」

「う、うん。……昨日の僕の様子に何か変わったことあった？」

僕は引きつった顔で聞いてみる

「本当におかしなやつだなお前。ずっと同じ感じだったぞ」

「どんな会話をしてた？」

「先生がいい加減な人だーとか、どこの小学校に通ってたーとか、家族構成とかだったかな」

例えばその帰り道から今までの記憶がなくなったただけだとすれば、いきなり時間が飛んだのも分かる
だが、その会話内容はおかしい
なぜなら僕は記憶を失ってるので家族構成やら小学校やらなんて分かるわけがない

「HRをーはじめちゃいまー」

やる気ない先生が来たので話を中断した
先生の話聞き流しながらぼーっと考える

とりあえず考えられる可能性は
帰り道から『今』までの時の記憶が消えて、その消えた間のみ生
い立ちの記憶が戻っていた

あの時僕は次の日に飛ばされ、その間誰かが入れ替わっていた

うーん

頭が混乱してきた

このHRが終わったら愛なんとか君や先生に記憶喪失のことを話してみよう

3話 長狩 着琉

どうやら教科書や筆箱などの最低限の持ち物は日替わりで用意されてる(？)みたいだ

ほとんど挨拶だけの授業が終わり昼休み

愛なんとか君が話しかけてきた

こいつはもしかして僕のことが好きなのかもしれぬ

勘弁してください

「だから愛なんとかじゃねえっつもの！あとホモでもねえよ！そんな気持ち悪い愛なんかいらねえ」

心を読むなよ……

てか世界中のホモの方々に失礼だろ

愛は人それぞれだし

「あ、別にホモを否定してるわけじゃねえからな。ただ俺自身は男と愛を紡ぐのは御免だな」

そりゃ僕だつて嫌だよ

「シクシクシクシク詩句市区志久敷くシクシク死苦刺紅……」

教室の隅で凄くネガティブなオーラで泣いている女の子がいた

「愛なんとか君。彼女は確か……」

「おさがり きる長狩着琉だ。ちよつと声かけてみようぜ。それが愛だ」

愛なんとか君と共に長狩さんの下へ

「俺と愛を語らないか長狩」

「うん。愛なんとか君は黙ってて。何かあったの？長狩さん」

体育座りで泣いていた長狩さんが顔を上げた

髪はツインテールで、幼い顔立ちの可愛い子だった

「ぐすつ……あのね、私いつもお兄ちゃんのお下がりの服ばかり着せられるの」

長狩さんはシクシク泣きながら続ける

「お兄ちゃんはいつも新品の服ばかり買ってもらって私はいつもいつもいつもいつもいつもお兄ちゃんのお下がり。制服以外女の子の服買ってもらったことないの。……あつ、下着だけはお下がりじゃないよっ」

長狩さんの爆弾発言に愛なんとか君は赤くなる

愛なんとか君は今にも熟しそうなリングゴみたいな顔だ

「なっ、しししし下着！！？……べ、別に想像なんてしてないからな！！……う、そんな目でみ、見ないでくれよ！」

僕はポカーンと愛なんとか君を見ていた

「う、こんなの不純だーーーー！！！！」

愛なんとか君は走って教室から出て行った

どうやら彼は愛愛言つくせにこついつ話が究極的に苦手らしい

「あんなアホはほつといて……親に文句とか言った？」

「それがね……うちはお金がないからお兄ちゃんの服しか買っ
てあげられないのって」

な、なんだそれ……

いろいろと無茶苦茶だ

「そのお兄さんはなんて？」

「お兄ちゃんは毎日バイトが忙しくて夜遅く帰ってくるの。だから
あまり喋らない……」

……

年頃の女の子なのにひどい扱いだ

「それなら俺たちでなんとかしようぜ！」

いつの間にか愛なんとか君がいた

「な！いいだろ？沖」

「え？うーん……」

どうしよう

どうにかするってことは長狩さんの家に行かなくてはいけ
ないでも学校の外にでたらまた時間が飛びそうだ

「長狩さん、君のお兄さんってこの学校にいる?」

「シクシク……うん。3年3組にいるよ?」

それなら僕でも協力できそうだな

「じゃあ放課後にお兄さんの下へ行ってみようよ。僕と愛なんとか君と一緒に」

「その案は賛成だが沖よ。愛なんとか君って逆に言いにくくないか?」

「ほんと?ありがとう。江園君、愛なんとか君」

「お、長狩……お前まで」

こうして放課後3人でお兄さんの下へ尋ねることになった
記憶喪失の件はその後でもいいだろう

ほんととはこんなことしてる場合じゃないんだけどね
僕って楽観的というかお人好しというか……

可愛い女の子の泣き顔を見せられたら助けてあげたくなるのは男
の悲しい性だね

4話 長狩 畿乃

放課後

僕、長狩さん、愛なんとか君の3人で3年3組の教室へ向かった
長狩さんのお兄さんと相談するために

「ここか……。沖、お前呼べよ」

「まあ、いいけど」

長狩さんは柱の影に隠れてる
……隠れる必要があるのか？

「すみません。長狩さんいますか？」

適当なクラスの男子に尋ねる

「長狩は俺だけど」

まさにミラクル

適当に話しかけた人が長狩さんのお兄さんだった

「何か用？」

「実はですね……」

妹が兄のお下がりばかり着せられて困ってることを告げた
ちなみに長狩さんは隠れたままだ
まあ、黙っておこう

「妹の理不尽な待遇を解決してやれよ。それが兄弟愛だろ？」

もう君は喋らなくていいよ

よく恥ずかしげもなく愛なんて言えるよね

その割に無茶苦茶ウブみたいだけど

「着琉の服か……。いろいろと訳があつてね……」

お兄さんは畿乃きのみという名前らしい

これまた珍しい名前だな

畿乃さんは語り出した

母が着琉を身ごもった直後、父の通っていた会社が倒産

それから父はやさぐれていった

父は妊娠している母やまだ幼い畿乃に暴力を振るっていた

そんな毎日に耐えられず、母は父と離婚した

母は畿乃と着琉の両方を引き取りシングルマザーに

不幸中の幸いか父から慰謝料をそこそこの額受け取っていたので

貧しいながらもなんとか生活できていた

しかし、慰謝料の貯金が尽き生活はさらに苦しくなった

精神的にも肉体的にも切り詰められた母は

「あなたを妊娠した時に父さんの会社が潰れた……あなたは疫病神よ」

と、貧乏を着琉のせいにした

それから母は着琉に冷たく当たった

その頃から着琉は畿乃のお下がりばかり着させられた

母は畿乃に対しては優しく父の暴力と一緒に耐え抜いたから……と畿乃は考えている

畿乃は着琉に優しく接してきたが畿乃が中学3年になる前、畿乃がバイトを始めた
毎日バイトで忙しくなった畿乃はなかなか妹に構うことができなかった

「……これが俺と着琉の過去だ」

僕と愛なんとか君は沈黙する
愛なんとか君もさすがに愛愛言うのは自重してるみたいだ

「アンタ、兄なら妹をもっと大切にしろよ！バイトの時間減らすとかさあ！アンタの妹への愛は嘘なのかよ！？」

前言撤回

愛なんとか君はやっぱり愛なんとか君だった

「……」

畿乃さんは黙りこむ

僕は興奮してる愛なんとか君を宥めて口を開く

「なんで初対面の僕たちに過去を覚えてくれたんですか？」

畿乃さんは目を細めて語った

ちなみに妹の着琉さんは柱の影で話を聞いている
どうやらお兄さんは着琉さんに気づいてない様子だ

「着琉は我慢強い子でね。友達とかに自分の服について話したことはないんだ。いつも元気な“ふり”をしている。……だが、俺が構わなかったことで着琉は悲しんだみたいだね。……それについては深く反省してるよ」

畿乃さんはばつが悪そうな表情をしていた

「あの子が誰かに自分の悩みを話すことって初めてでね。それだけ信頼されているなら話してもいいかなって」

今日初めて話したことは秘密にしておこう

「悪いと思ってんなら長狩に構ってやれよ！それが愛だろ？」

愛なんとか君……

相手は上級生だよ……

「……これは着琉には秘密にしておいてね。実は――」

お兄さん……畿乃さんが語ったことを聞いた着琉さんが涙を流し

……まあ、その後いろいろあってこの問題は解決した

着琉さんは僕や愛なんとか君に感謝したけど結局僕たちは何もやってない

僕たちが何もしなくても自動的にこうなったしね

長狩兄弟と別れた後、僕は愛なんとか君に――記憶喪失の話をしてみた

そしたら……不可解な現象が起こったんだ……

4話 長狩 畿乃（後書き）

次回に語られなかった部分を書きます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8453m/>

ジュニア ハイ スクール ~そのまんまな名前~

2010年10月8日10時56分発行